

世界とブラジル、日本をつなぎ、地球規模の課題解決に貢献したい

「リオ+20」の開催国ブラジル。地球規模の課題にどう取り組むか。JICAブラジル事務所の小林千晃さんは、その一つの手段として、ブラジルが持つ技術力を他の途上国へ伝える三角協力が有効だと考えている。

中

南米に古くから伝わる民謡やフォルクローレ音楽を中学生の時に聞いたことがきっかけで、この地域に関心を持ち始め、高校時代の1年間はチリに留学しました。この間、日本では感じるものがなかった貧富の差を目の当たりにし、衝撃を受けました。

一方で、サケの養殖が行われていなかったチリを世界有数のサケ輸出国に変えた日本のプロジェクトに感銘を受け、国際協力に関心を持ったのです。その後、大学では文化人類学を学び、市場経済化に巻き込まれて独自の文化を失っていく中南米の少数民族について研究。こうした開発の弊害も知った上で、日本の良き友である中南米の国々に少しでも何かできればと思い、JICAへの就職を決意しました。

これまでさまざまな部署に所属してきましたが、地球環境部時代にかかわった多くの洪水対策プロジェクトが印象に残っています。近年の気候変動の影響で、日本でも、ゲリラ豪雨という言葉が使われるようになりました。想定雨量を大きく超える集中豪雨が、世界各国で洪水被害を引き起こしているのです。

中でも、2010年に「ジャカルタ首都圏総合治水能力強化プロジェクト」を一から立ち上げたことは大きな経験になりました。インドネシアの首都ジャカルタは、人口が2400万人を超える世界でも有数の巨大都市。しかし、無秩序な流域の開発により毎年

のように洪水が発生しています。これは同国の経済成長を妨害するばかりか、昨年発生したタイの洪水のように、現地に進出している日本企業にも多くの影響を与えます。

そこで、プロジェクトでは河川への雨量の流出を抑える規制づくりや、貯水施設の設置の義務化など、ソフト面での対策を推進することに。私は関係省庁との調整を担当しましたが、インドネシアではダムや堤防の建設を行う省庁と流域の開発規則を担当する省庁が異なるなど、縦割り行政に悩まされながら関係者と何度も協議を行いました。また、洪水の原因となる河川の上流から下流までインドネシア政府の担当者とともに歩き、住民が捨てたごみが川の流れを妨げていること、地盤沈下により排水がうまく行われていないことなど、洪水には多くの要因が絡み合っていることをこの目で知り、その知見をプロジェクトに生かすことができました。

現在勤務しているブラジル事務所では、三角協力を中心に業務を担当しています。これは、ブラジルが持つ高い技術に日本の協力を組み合わせて、技術を必要としている第三国に移転することです。例えば、ブラジルは衛星を利用して熱帯雨林を監視するモニタリング技術を持っているので、同じく熱帯雨林を有する中南米、東南アジア、アフリカ地域で活用してもらえようJICAが研修を実施し、ノウハウを伝えているのです。

この三角協力をを行うに当たり、第三国のJICA事務所と共同でその国のニーズを

調査し、ニーズに基づいたプロジェクトの立案や管理を行うのが私の仕事です。環境分野以外にも、モザンビークに対する熱帯サンパナでの農業開発支援やアンゴラに対する保健人材育成強化支援など、全世界をターゲットに多岐にわたる分野で約40のプロジェクトを実施中です。三角協力はブラジルと二人三脚で行う事業のため常にブラジル側の実施機関と綿密な連携を図る必要があります。お手柄、多くの手続きに多大な時間を要したり、強く意見を主張されたりと調整に苦労することもありますが、相手を立てる姿勢を忘れずに交渉することを心掛けています。

今年開催される「リオ+20」に合わせ、JICAは日本大使館と共同で、ブラジルにおける日本の協力の成果を発信していく予定です。ブラジルは世界第6位の経済大国に成長した一方で、世界最大の熱帯雨林の保全や都市化に伴う都市環境整備、近年では、防災対策も大きな課題になるなど、取り組むべきことは多くあります。JICAは「環境」をブラジルに対する援助重点分野の一つに掲げ、今後も同国とのパートナーシップを生かした支援を続けていきます。



JICAブラジル事務所
三角協力・社会開発
第二班長

小林 千晃
Kobayashi Chiaki

大学卒業後、2005年にJICAに就職。アジア第二部(当時)、インドネシア事務所、青年海外協力隊事務局、地球環境部などを経て、2010年11月から現職。



南米諸国連合の会合で、保健分野におけるブラジルとの三角協力の成果を発表(左から3人目)



ジャカルタで洪水対策プロジェクトを進めるため、インドネシア側の担当者と協議する小林さん(右端)